

大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に 期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連

伊多波 美 奈 埼玉大学大学院教育学研究科¹⁾

首 藤 敏 元 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

キーワード：ボランティア活動、自己効力感、結果予期、協調性、教員養成

1. 問題と目的

ボランティア活動は自発的に行われる活動であり、その理由の一つとして「社会に役立ちたい」という社会貢献の動機がある。しかし、20代男女の32.9%が「社会に役立ちたい」と思うかどうかという質問に対して「あまり考えていない」（内閣府，2015）と答えている。はたして20代の若者は社会への貢献意識が弱いのだろうか。

ボランティアとはラテン語のボランタス（自由意志）を語源としている。最新学習指導用語辞典（辰野，2005）によると、ボランティア活動とは社会奉仕活動と同じであり、「自らの意志で公共のために役立つ仕事を物理的な報酬を求めずにする活動」とあり、「それまでの犠牲的・奉仕的な活動から自由意志での生き方の表現としての活動という意味合いを強めた」とある。田中（2015）はわかりやすい表現としてボランティア活動を「自らすすんで（主体性・自発性）新しい社会をつくるために（社会性・公共性）お金をあてにせず行う（無償性・非営利性）」活動であるとしている。しかし、有償ボランティアや学校における課題あるいは単位の一つとしてボランティア活動が取り上げられることもあり、必ずしも上記のような定義に当てはまらなくなっているのが現状である。

内閣府（2015）が毎年行う「社会意識に関する世論調査」によると社会のために役立ちたいと思っている人の割合は依然として高い水準を維持している。役立ちたいと考えているのは男女共に40代以降が目立ち、これは子育てが一段落したり、あるいは職場である程度の地位に就くなどして生活に余裕が出ていたりすることが考えられる。一方、役立ちたいと思わない年代として20代男女、70歳以上男女が挙げられている。ただし、2011年（平成23年）の東日本大震災を境に20代男女の傾向は変わってきている。平成23年度社会生活基本調査（総務省統計局，2011）によると「災害に関係した活動」の行動者率が平成18年の調査に比べ全ての年齢で上昇したとある。先の阪神・淡路大震災以降、その教訓から迅速な救助活動、支援活動が展開されている。その結果がこの調査にも反映されていると考えるのは妥当なことであろう。35～49歳の伸び率が高いが、注目すべきは20～24歳である。内閣府が行う「社会意識に関する世論調査」では「社会のために役立ちたいと思わない」傾向であった20代が、「災害に関係した活動」参加には30代～40代に続いて高い伸び率を示している。その一因として、大学等におけるサークル活動やゼミ単位での参加が考えられる。

学習指導要領（文部科学省，2014）では「生きる力」をはぐくむことを目的とし、奉仕活動・体験活動を積極的に取り入れることが推進されている。大学においては学生に対する支援策としてボランティア関連科目の設置や相談窓口の設置、インターンシップを含めた自主的なボランティ

1) 現所属：町田保育福祉専門学校

ア活動の単位認定、ボランティア休学制度の導入など、活動を行いやすい環境の整備が図られている。そのため、学生の学びに近い活動に参加することも可能である。たとえば、看護師や介護士を目指すなら障害児・者施設や高齢者施設での活動に参加したり、教員を目指すなら学習ボランティアとして地域の小学校と連携したりする事例がある。北川ら（2000）は看護職を目指す学生が糖尿病の子どもを対象としたサマーキャンプに参加することによってどのような教育効果をもたらすかをまとめている。その結果、「役割の理解・責任感、子どもの理解、子どもと学生の相互作用の過程を発達させる」教育効果があることがわかったと報告している。和井田ら（2015）は東日本大震災で被災した小学校を定期的に訪れ、ボランティア活動を行っている。参加するのは教育学部に在籍する学生のうち実習や就職活動などで時間を制約されない1～2年生であり、彼らは活動を通して「新しい自分を発見することができた」「子どもの心に対するケアが以前よりできるようになった」など肯定的な回答している。

北川ら（2000）と和井田ら（2015）の報告には、いずれも自ら進んでボランティア活動に参加した学生の姿が描かれている。一方、寺山（2008）は資格取得のためにボランティア活動が義務づけられている学生について報告している。学生は高齢者福祉施設での20回の活動を通じて主体性や積極性が確立され、そこで出会った職員や施設利用者との人間関係を通して身につけた勇氣と自信が就職に繋がったことを報告している。このように学習と関連するボランティア活動に参加することは、学生自身の意欲を高め、ひいては学習そのものにも好影響を及ぼすことが示唆される。ただし、先行研究においては参加者の心の変容を追ったものはあっても、実際に学習にはどのような効果があったのかを明らかにしたものはほとんどない。今後は授業の理解や実技にどのような影響を与えたかなど、より学習効果がわかるような、ボランティア活動と学習との関連を明らかにしていくことが望まれる。

以上のように、ボランティア活動の目的は純粋に利他的なものに限らず、自らの学習への成果を期待するものや大学での単位取得という外発的なものもある。これはボランティア活動が「援助者から受益者へ」という一方向的な関係ではなく、「人と人の支え合い」という双方向な関係を背景にもつことを示している。また、妹尾（2008）の研究結果が示すように、ボランティア活動の中での援助効果や社会的効果（人間関係の広がりなど）がボランティア活動継続の動機づけを高める。そこで、本研究は、将来教師や保育士を目指す学生を対象として質問紙調査を行い、彼らのボランティア活動の経験の有無とその種類、参加動機、不参加理由、参加した満足度をとらえ、それらのボランティア経験要因とボランティア活動の動機づけとの関連を検討し、教員・保育士養成におけるボランティア活動の意義を考察する。

ボランティア活動は自己調整（Bandura, 1986）された行動の一種である。Bandura（1986）によると、行為を効果的に自己調整するためには、行動によって結果を出せるかという結果予期（outcome expectancy）とその行動を遂行可能かという効力予期（efficacy expectancy）の2つの認知が必要になる。この両者の複合的な自己認知は自己効力感（self-efficacy）と呼ばれ、動機づけプロセスの重要な要因であるとみなされている。本研究では、ボランティア活動の動機づけ要因として、自己効力感尺度（成田ら, 1995）と活動成果の期待（結果予期・結果価値）をとりあげた。

さらに、ボランティア活動は向社会的行動に分類されることがある（首藤, 1995, 2011）。向社会的行動は「他者の利益を目的とした行動」であり、状況的な要因の影響を受けるだけでなく、そのような行動をとりやすいパーソナリティ特性（向社会性）の影響も受けることが分かっている。

Yeates & Selman (1989) は、協調性が「相手に自分合わせる自己変化」だけでなく、「相手を説得して自分の要求に合うように変容させる他者変化」の側面も併せもつ積極的で自他双方向的な側面をもつと考えている。また、登張ら (2016) は協調性について概念的な分析を行い、協調性を他者・集団に溶け込むといった調和的な側面だけでなく、他者と協同的な関係をつくり出すという積極的・創造的な側面をもつ多面的な概念であるとみなし、多面的協調性尺度を作成した。本研究ではボランティア活動経験との関連を見るためにこの尺度を用いることにした。

方法

(1) 参加者

首都圏の大学に在籍する学生300名が調査に協力した。全員が教員もしくは保育士養成系の大学に所属していた。

(2) 手続き

後期授業の初回オリエンテーションの時間を利用して質問紙を配布・回収した（回収率100%）。実施時期は平成27年9月28日～10月19日。

(3) 質問項目

まずフェイスシート項目として、性別、年齢、現在の所属について質問した。

次に、ボランティア経験について質問し、ボランティア経験「有り」と回答した参加者には次の①から⑤の質問を行った。①経験したボランティア活動の種類（表1）を17項目について尋ねた。②活動に参加した頻度を「定期的に週に1回」「定期的に月に1回」「定期的に2～3ヶ月（季節毎）に1回」「不定期」の中から1つ選んでもらい回答を求めた。③活動の満足度について「満足していない」「たいてい満足していない」「どちらともいえない」「たいてい満足している」「満足している」の中から1つ選んでもらい回答を求めた。④活動への期待（結果予期）について、活動に参加するにあたり期待すること、例えば学習の役に立つ、就職に有利だと思うなど13項目（表2）について、「そう思わない（1点）」～「そう思う（5点）」の5件法で回答を求めた。⑤参加動機について自由記述で回答を求めた。

ボランティア経験「なし」と回答した参加者への質問として、⑥活動に参加しなかった理由を「時間がない」「興味や関心がない」「自分には向いていない」「活動の情報が得られない」「ボランティアは自己満足の活動だと思うから」「知らない人達の中で活動することが負担である」「恥ずかしい」「その時間を他の余暇活動に充てたい」「アルバイトが忙しい」「勉強が忙しい」の中から当てはまるもの全てにレ点を入れてもらい、回答を求めた。

全参加者に対して、⑦今後参加してみたいと思うボランティア活動について、ボランティア活動への関心で挙げた17の選択肢の中から複数回答で求めた。⑧自己効力感：ボランティア活動と効力感の関係を検討するため、成田ら (1995) の「特性的自己効力感尺度」の23項目のうち19項目を採用し、「全然当てはまらない（1点）」～「よく当てはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。⑨多面的協調性：登張ら (2016) は協調性には調和性のような受動的な側面と協同的な関係を創造するという積極的側面があるというように協調性を多面的にとらえ、それを測定する尺度を開発した。この尺度は調和志向、協調的問題解決、非協調志向、および協力志向の4つの下位尺度からなる。本研究はすべての下位尺度を用い、合計20項目について、「全然当てはまらない（1点）」～「よく当てはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

(4) 倫理的配慮

参加者には質問票の中で、回答が任意であり無記名であること、いつでも中止できること、不参加による不利益は生じないことを教示した。

3. 結果

(1) プロフィール

回答者は男性103名、女性192名、未回答5名であった。年齢は18歳26名、19歳63名、20歳88名、21歳77名、22歳26名、23歳以上13名であった。所属は保育・教育系4年制大学が295名、未回答が5名であった。ボランティア経験の有無をたずねたところ、「経験あり」195名、「経験なし」101名、未回答が4名であった。

(2) ボランティア活動の種類、満足度、期待、動機について

ボランティア活動への関心として17種類の活動例を挙げ、それぞれについて「知っている」「興味がある」「参加したことがある」の中から1つだけ選んで回答を求めた。それをまとめたものが表1である。

表1 ボランティア活動経験と関心に関する回答者（割合）

	知っている	興味がある	参加したことがある
被災地従事	158 (53)	77 (26)	22 (7)
被災地募金	200 (67)	31 (10)	26 (8)
被災地物資	199 (66)	35 (12)	19 (6)
募金活動	195 (65)	26 (9)	32 (10)
支援物資	194 (65)	29 (10)	17 (5)
清掃活動	141 (47)	27 (9)	89 (29)
学習支援	100 (33)	77 (26)	84 (28)
福祉施設手伝い	137 (46)	60 (20)	50 (16)
慰問活動	159 (53)	44 (15)	27 (9)
読み聞かせ	160 (53)	68 (23)	15 (5)
傾聴	185 (62)	40 (13)	8 (2)
保育・子育て支援	122 (41)	84 (28)	28 (9)
障害児・そのきょうだいと遊ぶ	101 (34)	74 (25)	59 (19)
海外での支援	156 (52)	70 (23)	10 (3)
スポーツ	139 (46)	58 (19)	38 (12)
町おこし・村おこし	177 (59)	39 (13)	14 (4)
リサイクル活動	163 (54)	28 (9)	41 (13)

活動の参加頻度は「定期的に週1回」23名（11%）、「定期的に月1回」17名（8%）、「2～3ヶ月（季節毎）に1回」7名（3%）、「不定期」132名（67%）、「その他」16名（8%）であった。

満足度について尋ねたところ「たいてい満足していない」6名（3%）、「どちらともいえない」39名（20%）、「たいてい満足している」88名（45%）、「満足している」62名（31%）であった。

活動に期待すること（結果予期）について、ボランティア活動を通して得られる成果について期待することを設定した。学習面および行動・思考面において何らかの成果だと思われる13の設問それぞれについて「そう思わない」「たいていそう思わない」「どちらともいえない」「たいていそう思う」「そう思う」の中から1つだけ選んで回答を求めた。その結果をまとめたものを表2に

示す。

ボランティア活動に参加した動機を自由記述で求めたところ、その内容から、①「誰かのために自分からすすんで参加した」(34名、17%)、②「友達に誘われて参加した」(7名、3%)、③「先輩に誘われて参加した」(7名、3%)、④「先生に勧められて参加した」(7名、3%)、⑤「親に勧められて参加した」(4名、2%)、⑥「授業の一環で」(10名、5%)、⑦「サークル活動などで」(13名、6%)、⑧「自分のために参加した」(42名、21%)の8つに大別することができた(表3)。

表2 活動に期待すること(結果予期)(度数)

	そう 思わない	たいていそ う思わない	どちらとも いえない	たいてい そう思う	そう思う
現在の学習に役に立つ	8	8	15	80	83
学習の理解につながる	9	12	31	72	69
就職に有利である	21	13	57	72	31
実習にむけての練習になる	11	13	28	69	73
学校で学んだことを実践して確認できる	11	18	42	69	53
社会の一員として役に立っていると実感することができる	9	24	38	71	51
今後、仕事に就いた時の参考になる	5	9	26	80	74
参加することで自分自身が成長できる	4	4	16	76	95
参加することで友達が増える	15	33	68	49	29
自分自身の居場所を作ることができる	28	36	69	44	17
自分自身の考え方や行動を変えられることができる	6	10	44	81	53
達成感を得られる	2	11	35	77	69
有能感を得られる	8	41	62	61	22

表3 大学生のボランティア活動参加動機

カテゴリー名	具体例
①人のために、自ら進んで	人のために何かしたいと思ったから／新しいことに挑戦してみようと思ったから／困っている人たちの手助けのつもりで／興味があったから
②友達に誘われて	被災地へのボランティアへもともと興味が有り、一度は行ってみたいと思っていたときに友達から誘われたのでいい機会だと思い参加した／なんかみんながやるって言うから／学校の友達が多く参加していたから。自分の興味のある分野だったので、将来何がしたいのか考えるきっかけになると思ったから
③先輩に誘われて	アルバイトの先輩の引継ぎとして参加／先輩に誘われボランティアサークルに入ったから／大学のボランティアサークルがあり、先輩に誘われて強制的に参加したのをきっかけに、もっとやりたいと思うようになった
④先生に勧められて	学校の先生にすすめられたから／学校の教師や親にすすめられ、なかば強制的に
⑤親に勧められて	親が教師ということもあり、ボランティア関係の活動の情報が多く入ってきたため／親に誘われたので
⑥授業の一環として	高校生の時に、ボランティアを行うと単位がもらえ、それをためるとスキルアップ認定資格をもらえたため。ボランティアへの関心とその認定書をもらうために行った／講義でボランティア活動をしているかたの話しを聞き、学習支援を目的としたものではなく、時間を共有することを目的とした活動であるということで、興味をもち、将来の職業を考えていくうえで経験してみたいと感じたから
⑦サークル活動などで	入ったサークルでたまたまそういう活動をしていた／ボーイスカウトに所属していたので、その活動の一環として／中高で生徒会に所属しており、その活動の一環として行った
⑧自分のために	現場を見てみたかったから／高校生のとき、あしなが基金の活動、障害者運動会のサポートとして参加した。どちらも大学の履歴書に書けるからという安易な理由から／教育実習で得た感覚を忘れたくなかったから／将来のために役立つと考えたから。

(3) ボランティア活動に参加しない理由

ボランティア活動に参加しない理由を尋ねた。11の選択肢の中から複数回答で求めたところ、以下のような回答を得た（表4）。「その他」の欄に書かれていた自由記述としては「きっかけがない」「行動にうつせない」「興味はあっても資金面や距離的な面から諦めてしまう」「面倒」「やってみてみたい気持ちはあるけど…という感じ」などの回答が得られた。

表4 ボランティア活動に参加しない理由

参加しない理由	度数
時間がない	62
興味や関心がない	20
自分には向いていない	9
活動の情報が得られない	26
ボランティアは自己満足の活動だと思うから	2
知らない人達の中で活動することが負担である	17
恥ずかしい	6
その時間を他の余暇活動に充てたい	22
アルバイトが忙しい	25
勉強が忙しい	19
その他	11

(4) ボランティア活動経験と動機づけ要因との関連

ボランティア活動への関心で聞いたボランティア活動17種類について、人とのかかわりが主な活動となるもの（学習支援、福祉施設の手伝い、傾聴、保育、障害児・きょうだいとの遊び、スポーツ支援）を「対人志向」とし、作業が主な活動となるもの（被災地従事、被災地募金、被災地物資、募金、物資、清掃、慰問活動、読み聞かせ、海外支援、町おこし、リサイクル）を「奉仕志向」と命名して、それぞれの経験の有無がパーソナリティ要因と関連があるのかを検討した。

「対人」ボランティア経験がある者は142名、経験がない者は158名であった。「奉仕」ボランティア経験がある者は181名、経験がない者は119名であった。対人ボランティア経験の有無と奉仕ボランティア経験の有無をクロス集計した結果を表5に示す。

表5 対人・奉仕ボランティア経験有無（性別ごと）のクロス集計

性別	対人ボランティア経験	奉仕ボランティア経験		計
		経験なし	経験あり	
男性	経験なし	人 31	31	62
		(%) (30)	(30)	(60)
	経験あり	人 18	23	41
		(%) (17)	(22)	(39)
	計	人 49	54	103
		(%) (47)	(52)	(100)
女性	経験なし	人 37	54	91
		(%) (19)	(28)	(47)
	経験あり	人 28	73	101
		(%) (14)	(38)	(52)
	計	人 65	127	192
		(%) (33)	(66)	(100)

まず、ボランティア活動の経験が動機づけ要因とどのような関連を示すのかを検討するため、対人および奉仕ボランティア経験の有無と活動への期待（結果予期）との関係を分析した。結果予期の項目（表2）を因子分析し、「自分の成長への期待」（自分変化期待）と「大学での学習や将来の仕事面での期待」（学習効果期待）の2つの因子を抽出した。それら2つと、特性的自己効力感、多面的協調性を従属変数とする2（性）×2（対人ボランティア経験）×2（奉仕ボランティア経験）の分散分析を行った。平均と標準偏差は表6に示されている。

表6 対人ボランティア経験と奉仕ボランティア経験ごとの従属変数の平均値（SD）

対人ボランティア経験	奉仕ボランティア経験	特性的自己効力感	結果期待		多面的協調性			
			自分変化期待	学習効果期待	調和志向	協調的問題解決	非協調志向	協力志向
経験なし	経験なし	56.55 (8.63)	35.33 (2.08)	17.67 (2.08)	17.61 (4.39)	27.22 (6.55)	10.95 (3.56)	10.60 (2.80)
	経験あり	56.10 (10.55)	31.23 (6.95)	14.08 (3.99)	18.09 (4.42)	27.57 (3.98)	10.18 (3.05)	11.01 (2.25)
経験あり	経験なし	53.96 (8.94)	31.96 (5.09)	16.18 (3.14)	19.00 (3.50)	27.42 (3.41)	10.00 (3.10)	10.02 (2.33)
	経験あり	58.47 (10.51)	33.92 (6.48)	16.31 (3.47)	18.50 (4.39)	28.32 (3.82)	10.28 (3.51)	11.20 (2.86)

ボランティア活動に期待することについて、いずれのボランティア経験もないグループが男女ともに最も期待が高く（ $F_{(1,184)}=3.97, p<.048$ ）、「奉仕経験あり・対人経験なし」の男女は期待することが低かった。それぞれのボランティア活動の経験有無と性別で比較してみると、「対人ボランティア経験有無」は影響していなかったが、「奉仕ボランティア経験有無」は経験のある人の方が活動に参加することによって得られるものへの期待が高いという結果が得られた。性別においては男性よりも女性の方が高い期待をもつ傾向にあった。

ボランティア活動に期待することを自分変化期待と学習効果期待に分けて検討したところ、自分変化期待も同様の結果が得られた。学習効果期待に有意と認められる関連は見られなかったものの、ボランティア活動経験者の方が効果を期待する傾向にあることがわかった。

特性的自己効力感はボランティア活動の参加経験有無が有意に関係する傾向のあることがわかった（ $F_{(1,277)}=3.10, p<.079$ ）。性別で見ると男性はいずれの参加経験もない者が最も効力感が高く、対人ボランティア活動経験ありで奉仕ボランティア活動経験なしの者が最も低かった。奉仕活動経験ありの男子に対人ボランティア活動の経験有無は関係していなかった。女性はいずれのボランティア活動でも経験のある者が最も高く、対人ボランティア活動経験あり・奉仕ボランティア活動経験なしの者が最も低かった。

多面的協調性の調和では、対人ボランティア経験が有意に関係する傾向にあった（ $F_{(1,278)}=3.48, p<.06$ ）。男性では対人ボランティア活動経験ありの者が高いが、女性は奉仕ボランティア経験あり・対人ボランティア経験ありの者が高く、奉仕経験あり・対人ボランティア経験なしの者が低かった。奉仕ボランティア経験のない者には対人ボランティア経験は有意に関連していなかった。協調と非協調の側面にはボランティア経験は有意に関連しているとはいえなかった。

次に性別、対人ボランティア志向、奉仕ボランティア志向が活動に期待することおよびパーソナリティ要因である効力感、協調性に及ぼす影響を検討するために、特性的自己効力感、多面的協調性を目的変数とする重回帰分析を行った（表7と表8）。

表7 ボランティア活動の結果期待、協調性、ボランティア経験の相関

	性別	結果の期待		多面的協調性				対人参加経験
		自分変化期待	学習効果期待	調和志向	協調的問題解決	非協調志向	協力志向	
性別								
自分変化期待	.207 **							
学習効果期待	.155 *	.612 **						
調和	.050	.160 *	.131					
協調	.026	.240 **	.051	.125 *				
非協調	-.218 **	-.130	-.074	-.154 **	-.351 **			
協力	.008	.299 **	.116	.053	.361 **	-.413 **		
対人参加経験	.129 *	.149	.276 **	-.001	.067	-.059	-.018	
奉仕参加経験	.118 *	.065	.011	-.022	.074	-.036	.176 **	.338 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

表8 ボランティア活動の結果期待と多面的協調性を目的変数とする重回帰分析

目的変数	説明変数	β 係数	R^2	F 値	
自分変化期待	性別	.193 **			
	対人ボランティア	.126 +	.246	4.050	**
	奉仕ボランティア	.026			
学習効果期待	性別	.136 +			
	対人ボランティア	.275 **	.310	6.720	**
	奉仕ボランティア	-.052			
特性的自己効力感	性別	.027			
	対人ボランティア	.057	.171	2.820	*
	奉仕ボランティア	.136 *			
調和志向	性別	.054			
	対人ボランティア	.002	.058	0.320	
	奉仕ボランティア	-.031			
協調的問題解決	性別	.011			
	対人ボランティア	.047	.087	0.720	
	奉仕ボランティア	.056			
非協調志向	性別	-.215 **			
	対人ボランティア	-.035	.221	4.790	**
	奉仕ボランティア	.007			
協力志向	性別	-.012			
	対人ボランティア	-.088	.196	3.740	*
	奉仕ボランティア	.209 **			

* $p<.05$ ** $p<.01$

自分変化期待については性別が有意な影響を及ぼし、対人ボランティア志向は正の影響を及ぼす傾向が示された。学習効果期待については性別が正の影響を及ぼす傾向が示され、対人ボランティア志向が有意な影響を及ぼしていた。特性的自己効力感については奉仕ボランティア志向が有意な影響を及ぼしていたが性別と対人ボランティア志向は影響を及ぼしていなかった。協調性を各因子別に見ていくと、調和志向と協調的問題解決には性別、対人ボランティア志向、奉仕ボランティア志向のいずれも有意な影響を及ぼしていなかった。非協調志向について、性別は有意な影響が示されたが、対人ボランティア志向、奉仕ボランティア志向は有意な影響を及ぼしてい

なかった。協力志向については奉仕ボランティア志向が有意な影響を及ぼしていた。

4. 考察

今回の調査で300名の学生のうち約3分の2にあたる学生がボランティア活動の経験があるということは「社会に役立ちたいと思わない」20代男女の印象を覆すものである。おそらく学生であるか、社会人であるかということが少なからず影響しているのではないかと考えられる。つまり、生活の中で使える時間に差があるのではないかと、ということである。しかし、ボランティア活動に参加しなかった学生も100人ほどおり、彼らが参加しなかった理由として最も多かったのが「時間がない」であった。複数回答で「時間がない」と回答した学生は同時に「アルバイトが忙しい」「勉強が忙しい」「その時間を他の余暇活動に充てたい」との回答も目立った。一方、「活動の情報が得られない」「やってみたい気持ちはあるけど……」「資金面や距離的な面から諦めてしまう」といった回答からは環境さえ整えば、活動に参加してみたいという学生の姿がうかがえる。このことから、20代男女がボランティア活動に参加するかしないか、あるいは参加できるかできないかという問題については、時間とぎっかけといった環境要因が関係していると考えられる。

実際に参加した学生が多かったボランティア活動は「学習支援」、次いで「障害児・兄弟児と遊ぶ」であり、「教える」「かかわる」という経験が「現在の学習に役立つ」「実習に向けて練習になる」「仕事に就いた時の参考になる」「自分自身が成長できる」など、今の学びや将来に向けて直結するような、つまり自分にとってプラスになるような活動に積極的に参加している様子が見られた。これは学生自身が興味を持っていることに加えて、アルバイト募集やボランティア募集という形で学内に情報が多いことが関係していると思われる。

17の活動例をその活動内容が作業中心である「奉仕志向」と、直接的に人とかかわることが中心である「対人志向」に分類したところ、活動参加の傾向として「奉仕志向」のほうが「対人志向」に比べてやや多かった。これは「清掃活動」に参加したことがある学生が多いということが影響しているのではないかと考える。「清掃活動」はボランティア活動であるというよりは「奉仕活動」として学校生活の中、特に義務教育の段階に組み込まれている場合がある。そのため、回答者の中にはその参加経験から答えた者もいると推測される。

参加頻度で「不定期」が最も多かった要因として「参加したいと思った時期」と「参加できるタイミング」の関係があるのではないだろうか。現在の大学のカリキュラムは「十週または十五週にわたる期間を単位として行う」ことが大学の設置基準として決められているため（大学設置基準、昭和31年10月22日文部省令第28号。最終改訂：平成27年3月30日文部科学省令第13号）、更には実習や試験などがあり参加できる時間が限られていると考えられる。そのため、自分が参加できる時に参加しやすい環境があるということが学生にとって積極的な参加に繋がると同時に必要であると言える。

参加した大学生の77%が満足していると回答している一方、23%の大学生は満足していない状況である。本研究ではその内容について言及していないため、どのような内容や状況が満足か否かに作用したのかを明らかにしていない。継続して参加することが効力感を高め、参加者自身が楽しみながら成長を感じられる内容であること、更には人との繋がりや広がりを感じられることが総じて活動への満足感をも高めると推測できる。本研究においても満足については同様のことが言えると考えられるが、他方、満足していない理由を明らかにすることはその後の継続参加に繋

げることや学習にボランティア活動を活用する上で支援の鍵となるため、今後、詳細なデータを蓄積することが望まれる。

参加の動機（回答者によってはきっかけ）としては「自分からすすんで参加した」と回答した学生が多かったものの、「友人、先輩、教師、親」といった「周囲の人間」が影響している学生も多く見うけられた。このことは授業やサークルなど、学生生活においてボランティア活動に参加するということが浸透してきている結果といえるのではないだろうか。ボランティア活動に参加経験のない学生の理由として「時間」「きっかけ」「情報」といった環境要因が挙げられた。言い換えれば、これらの要因がクリアされれば、参加に積極的になる学生が増えると考えられる。

本研究の大学生はボランティア活動に参加することで「自分自身の成長」と「学習効果」の両方の成果を期待していた。自己効力感に関しては、男性の場合、ボランティアの経験がない者が最も高く、女性の場合はボランティア経験のある者が高いという結果が得られた。継続参加する中で活動の見通しが持て、なおかつ自分のできることが解って行動し自信につながることで効力感を高めるとも考えられるが、上記の結果はそれを支持しなかった。今後のデータの積み重ねにより更なる検証を続けることで、この矛盾を明らかにしたいと考える。

奉仕ボランティア志向が効力感や協調性に影響を与えた原因として、活動内容が作業中心であることは、その活動の結果が目に見えてわかりやすく、活動者自身にも成果を感じられやすいことが考えられる。しかし、活動内容が人とかかわりが中心である対人ボランティアの場合、相手の反応から活動の成果を判断することになるものの、コミュニケーションをはかることが困難な相手や状況など、活動の成果を実感することが難しい場合もある。それが今回の結果に反映されたと考えられる。

児童を対象にした研究において、学校教育における社会体験としてのボランティア活動や世代間交流は、子どものポジティブな社会性を発達させるのに有意義であることが示されている。村山（2009）は小学生4～6年生を対象に、高齢者との交流のあり方を「接触頻度」と「行動の多様性」からとらえ、子どもの共感性と高齢者への援助行動との関連を調査した。高齢者との多様な会話と接触回数が多いほど、児童の共感性も高いことが見出された。本研究結果から、大学生において、ボランティア活動は自発性・無償・社会性を伴う活動ではあるが、参加することにより効力感や協調性を高めることが期待される。効力感を高めるためには自己原因性を持てることが必要であり、そのためには教師など支援者によるきっかけ作りと学生自身が選択できる環境作りが教育現場における今後の課題といえる。

謝辞

本研究の実施に際し、調査にご協力頂きました大学生の皆様、および調査の仲介をしていただきました諸先生方に心より感謝いたします。

文献

- Bandura, A. (1986). Social cognitive theory of moral thought and action In Kurtines, W. M. & Gewirtz, J. L. (Eds.), *Moral behavior and development: Advances in theory, research and applications*. Hillsdale, NJ.: LEA, 71-129.
- 伊藤忠弘 (2011). ボランティア活動の動機の検討 学習院大学文学部研究年報, 第58集, 35-55.
- 北川かほる・三瓶まり・福井典子・南前恵子・前田隆子・笠置綱清 (2000). ボランティア体験が学生に

- もたらす教育効果（Ⅱ） 鳥取大学医療技術短期大学紀要, 32, 35-40.
- 文部科学省 (2014). 平成26年度文部科学白書 特集3 未来に向かう教育再生の歩み 文部科学省
www.mext.go.jp/ (最終閲覧; 平成28年1月12日)
- 村山陽 (2009). 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響. 社会心理学研究, 25, 1-10.
- 内閣府 (2015). 平成27年度社会意識に関する世論調査 <http://survey.gov-online.go.jp/index-sha.html> (最終閲覧; 平成28年1月12日)
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—, 43, 306-314.
- 妹尾佳織 (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要, 第16号, 35-42.
- 首藤敏元 (1995). 道徳性と社会性の発達 二宮克美・繁多進編集「たくましい社会性を育てる」有斐閣, 83-98.
- 首藤敏元 (2011). 共感と向社会的行動「児童心理学の進歩 2011年版」(平木典子・稲垣加世子・斉藤こずゑ・高橋恵子・氏家達夫・湯川良三編) 金子書房, 102-125.
- 総務省統計局 (2011). 社会生活基本調査 <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf>
- 辰野千壽 (2005). 最新学習指導用語辞典 教育出版株式会社
- 田中雅文 (2015). ボランティア活動をどのように広げていくか 児童心理8月臨時増刊号
- 寺山節子 (2008). ボランティアが及ぼす教育効果の実際—学生の主訴を中心に— 中国学園紀要, 7, 95-99.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの (2016). 多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性 人間科学研究 (文教大学人間科学部), 37, 151-164.
- 和井田節子・小泉晋一・小林田鶴子・田中卓也 (2015). 東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援—教員養成課程の大学生によるボランティア活動の可能性と課題— 共栄大学研究論集, 13, 201-225.
- Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989). Social competence in the schools: Toward and integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, 9, 64-100.

(2016年3月27日提出)

(2016年5月10日受理)

Correlations between university students' volunteer experiences and their expectations about the results of such activities, self-efficacy, and cooperativeness

ITABA, Mina

Graduate School of Education, Saitama University

SHUTO, Toshimoto

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Correlations between university students' volunteer experiences and their expectations about the results of volunteer activities, self-efficacy, as well as cooperativeness were investigated. A questionnaire survey was conducted with university students hoping to become school teachers or nursery care workers (N=300). The results indicated that the students' past volunteer experiences could be classified into two types: (1) service oriented type that focused on work, (2) and interpersonal support oriented type that focused on direct interactions with people. Volunteer experiences of the first type significantly increased generalized self-efficacy, which is a personality trait, and cooperative aspects of cooperativeness. On the other hand, volunteer experiences of the second type significantly increased self-development through volunteer activities and expectations for results of learning at universities. The above results are discussed from the perspective of the process of motivation for volunteer activities and necessity of developing support systems for students' independent activities at universities.

Key Words: volunteer activities, self-efficacy, outcome expectancy, multifaceted cooperativeness, teacher training program